

修復と保存の技術で文化財を守り、後世に伝える

事業内容

図書、雑誌、新聞、地図、図面、写真などの紙媒体記録資料のコンサベーション（利用のための修復）と、文化財を安寧に長期保存するためのアーカイバル容器の製造。「治す」と「防ぐ」を組み合わせたサービスを提供する日本で唯一の企業。2009年には「第11回 図書館サポートフォーラム賞」を受賞。2011年には文書等の救済支援のボランティア組織「東京文書救援隊」を立ち上げ、東日本大震災の被災地でコンサベーション指導を実施。HP等でも被災資料復旧関連のノウハウや特許を無償で公開・提供している。

特許登録番号と内容

特許第 4721042 号	紙媒体資料用の洗浄器
特許公開 2006-342453	紙媒体資料用の洗浄器
登録実用新案第 3163277 号	ファイルボックス
登録実用新案第 3162061 号	容器
登録実用新案第 3161638 号	保存箱

他、特許公開1件、登録実用新案1件（2012年4月現在）



代表取締役 木部 徹さん

伝統的技術と化学的な方法を駆使し「現代」の修復法を実施

株式会社資料保存器材は、図書や古文書、地図、写真をはじめとした紙資料のコンサベーション（利用するための修復）と、これらを良好な環境で長期するためのアーカイバル容器の製造の2本柱で活動を展開する日本唯一の企業。30年ほど前、木部徹代表取締役が趣味で紙資料の修復・保存分野の研究が進んでいる欧米の資料を読んだり、現地で見学するうち、日本にもニーズがあると感じて立ち上げたという。現在は、日本を代表する博物館や美術館、寺院等が保有する文化財も、数多く手掛けている。

木部代表が最初に参入した“修復”の分野は、昔は職人の技や勘所がものをいう世界。現代も熟練の技は重要な存在ではあるが、時代の流れの中で、それだけでは十分とはいえなくなったと木部代表は話す。「特に近代以降のものは、材料や製造法が急速に多様化しています。劣化の原因も大気汚染など、昔とは異なる要素が多々あります。こうした時代ごとの変化も考慮しなければなりません」。80年代頃から欧米では科学、とりわけ化学的な裏付けに基づいた修復を行うのが常識となっていっていった。木部代表も化学的なアプローチの修

復について、ノウハウを蓄積。それが同社の基盤になっている。

また同社は、欧米の技術を学ぶと同時に、独自の技術開発にも積極的だ。その一つが、古文書などを洗浄する「ポケット・クリーニング法」。フィルムと不織布で作った袋に紙資料を入れ、なんと水洗いするという。「繊維に入り込んだ汚れや経年とともに紙の内部から発生する酸などが、傷みの原因になるので洗うわけです。ただ紙は水を含むと破れやすくなるので、繊維を壊すことなく、しかも簡単に洗浄できる方法として考案したのがこれです」と木部代表。紙を水洗いする手法は昔からあったので、自社の技術と組み合わせて構築し、特許も取得した。

自社の知財を無償で公開し 社会貢献に活用

昨年、木部代表は東日本大震災で被災した紙資料を救援するボランティア「東京文書救援隊」を結成。「ポケット・クリーニング法」は手軽にそろう道具で初心者でも洗浄作業ができるので、スタッフによる現地指導やHP上で無償公開している。「自社の知財が、社会に役立つならこんなうれしいことはありません」と木部代表。情報公開すれば他社に模倣される心配もあるが、生き

COMPANY DATA

所在地：東京都文京区本駒込 2-27-16 富士前ビル
電話番号：03-5976-5461 URL：http://www.hozon.co.jp/
創業：1999年5月14日 資本金：300万円 売上高：非公開
従業員数：20人（2012年4月現在）



写真は甲冑と、付随する装飾具を共に収納するための保管箱。コの字状のスリプが着脱可能な形状で、収納したものを安全に取り出せるつづら箱。荷重のかかる底面には補強材を組み込み、歪みや破断が生じない構造にした

ワイヤー・ソーイング（wire sewing）により綴じられた書籍の修復。括を針金で中綴じし、製本されている。解体・金属除去をし、括の背を修補、綴じ直しの後、表紙と本体を接合する



た知財活用をしたいと、社会貢献を優先した。

とはいえ、この活動は持ち出しばかりでもないようだ。「ボランティア活動が、弊社の名前や技術を全国区にし、信用を高めるきっかけになりました。それがビジネスに直結するかはまた別の話ですが、自社のブランディングにつながり、ありがたいと思っています」と木部代表。知財が会社の成長の追い風にもなっている。

快適な保存環境を作り 予防する大切さを痛感

木部代表は「文化財など後世に残したいものをいかに守るかを考えると、修復だけでなく、壊れないようにすることも重要だと思います。予防医学と同じ発想です」と熱く語る。それを具現化するのが、同社のもう一つの柱、アーカイバル容器の分野だ。文化財類が劣化する原因の80%は保管環境だといわれている。「最適環境」は、紙や布地、金属など材質等により異なるので、大きな保管室で全てを管理するのは難しい。そこでそれぞれに適した容器に入れて収納することになる。

以前、この保管容器といえば桐をはじめとした木製のものが定番だった。しかし上質のものを作るには、時間もコストもかかる。品質が悪いと木材に薬剤が残って保管品に悪影響を与えたり、木が反り返って変形することもある。そこで近年は、コストと機能性を考慮して紙製

容器に代替するケースが増えている。

「使用する紙は、保管物に合わせて調湿性やガス吸着機能を付与します」と木部代表は説明する。形状も、少数多品種のオーダーメイドが大半だ。同社では設計図に合わせて手作業でカットしていたが、10年ほど前からはCADで設計図を作成し、それに合わせて紙をカットしたり折線をつける自動カッターシステムを開発。木部代表は「今まで手作業で行ってきた技術をどのように数値化し、プログラミングに落とし込むかに苦労しました。手間もコストもかかりましたが、効率性に加え、設計図をデータベース化できるのも大きなメリット。会社の大きな財産です」。

しかし、全て自動化で作っているわけではない。今、こうした容器は、紙をカットした平らな状態で納品するのが主流だが、同社は多くの場合、組み立てまで社内で行う。木部代表は「最終段階までこちらでできれば数倍丈夫なものが作れるし、軽金属を使ってさらに強度を高めるなど機能も盛り込みやすくなります。国宝級の文化財の保管担当者が弊社を選んでくれるのも、この辺りも評価してくれているのだらうと思います」と自信を見せる。

高い技術は海外からも注目され、各種のオファーも来ている。木部代表は海外展開も視野に入れながら、今後も後世に文化財を伝えるためにも修復と保存のノウハウを開拓・蓄積していきたいと話す。

知的財産活用のポイント

顧客と二人三脚で行う商品作りから 多くを学び、付加価値を追求

同社が手掛けるアーカイバル容器の多くは少数多品種で、1点ものも珍しくない。木部代表は「商品開発はお客さまの要望や知恵が、アイデアやヒントになることも多々あり、そ

れを盛り込みながら付加価値を追求するのが醍醐味」を話す。「修理」「保存」とともに、今後も国内外の先人の教えや顧客の声からも学びながら自社の知財を育てていきたいと熱い思いを抱く。